



株式会社 ぶぎん地域経済研究所
専務取締役/チーフエコノミスト
土田 浩 様

I. コロナと経済…世界、日本、埼玉

● 1. 世界経済は既にコロナ前超え

○世界全体では、2021年にコロナ前を上回る水準。
○中国は、武漢市封鎖を経て、2020年春頃から急拡大、2021年は過熱し、不動産バブル対策も。
○米国も、2020年後半から急回復、2021年はバイデン大統領の大型財政出動も後押しして、急拡大。
⇒日本は、世界と比べると、(経済の面で) 出遅れ感

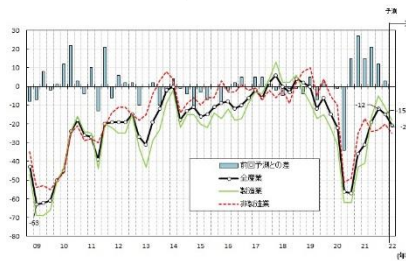
● 2. インフレと金融政策の転換

○世界の需要の急拡大に、供給態勢が追い付かず、世界中でボトルネックが随所に発生。…半導体、木材、非鉄、食料、原油、そして物流関係も。物は作れてもそれを運べない。例) ジャガイモ不足
○消費者物価(前年比)は米国+6.8%、EU+4.9%(2021/11月)、国民の関心は、景気刺激よりインフレ抑制へとようになってきています。
○米国は金融政策を転換。量的緩和の縮小を前倒し、続いて政策金利(短期金利)引き上げを想定。
⇒日本は、企業物価+9.0%も、消費者物価+0.5%(2021/11月)

仕入れ価格は高いが販売価格に転嫁できず
市場(長期金利、為替、株式)の動向にも注目

● 3. 埼玉経済

○企業の業況感: 製造業は、部品供給難による自動車減産と、中国向け輸出一服から、5四半期ぶりに悪化。



非製造業は、対面サービスの回復から改善←全国との状況と同様です

II. 日本の将来を考えるために

…2つの意味で世界史の転換点

● 1. 世界覇権争い

1989年 ベルリンの壁崩壊(米ソ冷戦の終結)
パックスアメリカーナの時代、アメリカ一強

↓
2018年 トランプ大統領時代の米中貿易摩擦(覇権争いを始めました)

・現在は均衡点を探る乱気流の真只中

● 2. 資本主義の変容

1980年代 新自由主義(市場経済万能主義)の台頭
…米レーガン、英サッチャーが主導
背景には、社会主義の退潮と資本主義の行き詰まり
(ニクソンショック・石油危機・スタグフレーション)

…1990年代以降は、グローバル経済化が後押し
↓(逆の動きも)

2010年代後半 自国第一主義、ポピュリズムの台頭
…米トランプ(アメリカファースト)、英EU離脱
※象徴的・時代の先を行っている動き
サンデル「それをお金で買いますか」、
ピケティ「21世紀の資本」
コロナで一気に進んで目の前の話に

● 3 見直されるマルクス

地球環境と資本主義…「人新世の『資本論』」(斎藤幸平)

・資本の増殖は、労働者だけでなく、自然環境からも搾取(生態系の攪乱、土壌疲弊)
・気候ケインズ主義(グリーン・ニューディール)
も、(成長を貪欲に追求すれば)地球の限界を超える

・長時間労働⇒過剰生産⇒環境破壊
「人間と自然とは労働で繋がっている」
・顔の見えるコミュニティ・自治体をベースに信頼関係の回復が不可欠

● 国と地域の話

全てが全国単位の市場取引でよいのか
江戸時代までの封建的なコミュニティでのお金の回し方もふえてくる

長年の信頼関係に基づくギブ安堵テイクの経済

国際収支 1980年~2020年

世界最大の債権国

内訳に注目

以前は輸出立国→

貿易収支

国内で付加価値を付けて、物だけ海外に、と

いう形だった

貿易収支が今やゼロに

輸出がなくなった

日本企業が海外で稼いだお金=作っているのは海外
→差し引きした利益だけが日本に

「国内の空洞化」

働く場所がない

工場があれば働く人がいて、波及効果がある

今はそれが無い状態

対策は、人口が増え、国内で活躍していくこと

※外国人が日本で働きやすい・ずっと住みたい…

増やしていくべきでは

日本というフィールドの中で 場所が大切

日本で経済活動をしてくれば、それに伴って使うものが多い

・ユダヤ型

その地を離れて離散した、苦難の歴史

・ドバイ型

人口…海外から来た労働者とその家族が多くを占める

世界で一番働きたい場所

世界中のVIPを呼んで国を栄えさせよう

※日本人は日本国土を有効に使って、それが国内を活性化させる方向に舵を切ってほしい

